

『訓蒙図彙』寛政版本の増補改訂

— 寛文六年初版本への回帰 —

The Supplement and Revision of the Kansei Version of *Kimnozuri*  
A Regression of the Kanbun 6th Version

楊世瑾  
Shiin YANG

摘要

日本第一部図解百科事典《訓蒙図彙》初版刊行后、先后刊行了増補改訂版等。本文旨在阐明寛政版本向寛文六年初版回帰的傾向并试图探明其原因。

キーワード：訓蒙図彙 寛政版本 増補改訂 寛文六年初版本 回帰

はじめに

今日に伝存する『訓蒙図彙』の主要な版本に、次の四種類がある<sup>1)</sup>。

- ① 寛文六年（一六六六）刊 初版『訓蒙図彙』二〇巻
- ② 寛文八年（一六六八）刊 『増補訓蒙図彙』二〇巻
- ③ 元禄八年（二六九五）刊 増補改訂版『頭書増補訓蒙図彙』二二巻
- ④ 寛政元年（一七八九）刊 増補改訂版『頭書増補訓蒙図彙大成』二二巻

本稿は、このうち、③元禄版本から④寛政版本への増補改訂のプロセスを検討し、④寛政版本の体裁が①初版本への回帰を志向していることをあきらかにすることを目的とする。

一、『訓蒙図彙』項目の増補改訂

表1は、③元禄版本を基準として、④寛政版本が増補した項目と削除した項目を、巻ごとに整理して示したものである。

表1・『訓蒙図彙』の項目の増補改訂—元禄版本から寛政版本へ—

巻	増補項目	削除項目
巻一・天文	嶽、峠、森、沼、藪(計5)	
巻二・地理		
巻三・居処		
巻四・人物		
巻五・身体		
巻六・衣服		
巻七・宝貨		
巻八・器用一	三絃	
巻九・器用二		
巻十・器用三		
巻十一・器用四	土瓶	櫛櫛 空子
巻十二・畜獸		牛角、狸力、狢狢、狢、獐、獐池、 微徇(計6)
巻十三・禽鳥	鷓、鶯、羽斑鷓、鶻、鶻、棕 鳥、菊戴、文鳥、四十雀、山 雀、小雀、繡眼兒、尾長、駒 鳥、九官、風鳥、喉紅鳥、深山 類白、黄雀、蒼鷺、草雀、雉 鳩、狗鴨、都鳥、音呼(計25)	雀、鶻、鷓、鶻、喚子鳥、姑獲 山鳥、石食鳥、畢方、疎斯、 鶻、鸞、鸞(計11)
巻十四・龍魚	鱈、河蝦	烏賊b、人魚
巻十五・虫介	燈蛾、蝮、蛻(計3)	蠶、殼a、殼b、殼c、殼d、 蛇蛻、蟬蛻(計7)
巻十六・米穀		
巻十七・菜蔬		蒟蒻
巻十八・果蔬		
巻十九・樹竹	錦帶花、箬	榧
巻二〇・花草	芙蓉、剪秋羅、剪春羅、胡蝶 花、杜若、菖蒲、嬰麥(計7)	剪羅、石蒜
巻二一・雜類	草駄天、鐘馗、伏羲、神農、倉 頊、皇帝、不動明王、巨靈人、張 九哥、西王母、通玄、衣通姫、人 鷹、赤人、白樂天、東坡、晋王義 之、小野道風、琴、香、蹴鞠、目 利、筭術、諸礼、弓、馬、劔術 囲碁、将碁、茶湯、立花、山伏、 鷹匠、能、狂言、淨留理太夫、三 絃、小弓、芝居役者、人形芝居、 軽業、鉢敲、鹿嶋事觸、猿舞、万 歳衆(計45)	狸々b、天狗、傳大士、元三大 師、弘法大師、臨濟大師、洞山大 師、采西禪師、道元禪師、鑑真和 尚、行基菩薩、親鸞上人、法然上 人、日蓮上人、初平(計15)

表1の巻二「雑類」について両者を比較すると、④寛政版本は③元禄版本を改訂する箇所が多い。つまり、④寛政版本は、③元禄版本とは異なる基準で項目を取捨選択したと考えられる。

そこで次に、③元禄版本を基準として、④寛政版本の改訂の過程を検討する。これによって、④寛政版本が、③元禄版本の項目を統合、または削除している状況を検証し、これら④寛政版本の改訂が、いずれも①初版本への回帰を志向していることを確認していきたい。

## 二、元禄版本の項目の統合

③元禄版本は、①初版本の項目を細分化していた。<sup>2)</sup>一方、④寛政版本の次の項目には、③元禄版本が①初版本を細分化した項目を再び統合することによって、①初版本の形式を復元しようとする傾向がみられる。

- ①初版本「轆轤」↓③元禄版本「轆轤」「櫛櫛」↓④寛政版本「轆轤」
- ①初版本「筭」↓③元禄版本「筭」「空子」↓④寛政版本「筭」
- ①初版本「角」↓③元禄版本「角」「牛角」↓④寛政版本「角」
- ①初版本「殻」↓③元禄版本「殻a」「殻b」「殻c」「殻d」↓④寛政版本「殻」

①初版本「蛻」↓③元禄版本「蛇蛻」「蟬蛻」↓④寛政版本「蛻」  
紙幅の都合上、ここでは次の一例のみを取り上げて考察することとする。

表2は、①初版本「轆轤」の一項目が、③元禄版本では「轆轤」「櫛櫛」の二項目に細分化され、さらに再び、④寛政版本では「轆轤」一項目へと改訂された過程を示したものである。<sup>3)</sup>

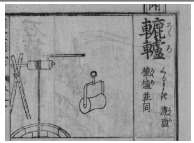
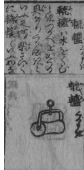

表2から、第一に、①初版本「轆轤」を、③元禄版本は「轆轤」「櫛櫛」の二項目に細分化する。

まず、①初版本「轆轤」本文は和名「くるまき」をあげ、「鹿盧」「櫛櫛」と同じと注する。

くるまき。鹿盧、櫛櫛並同。

①初版本「轆轤」の図像には「轆轤」「滑車」の二つが描かれている。左に井戸の上に縄を巻いた轆轤、その右に釣瓶を上下するための滑車である。

表2・「訓蒙図彙」寛文六年版本「轆轤」↓元禄版本「轆轤」「櫛櫛」↓寛政版本「轆轤」

「訓蒙図彙」 寛文六年版	「訓蒙図彙」 元禄版本	「訓蒙図彙」 寛政版本
 轆轤(巻十・器用三)	 轆轤(巻十・器用三)	 轆轤(巻十・器用三)

次に、③元禄版本「轆轤」の本文は次のとおりである。

轆轤は水をくむとき、つるべをかくる具なり。くるまきといふ。又独楽さいくに轆轤といふ物有。

③元禄版本「轆轤」の本文は、「轆轤」の用途「水をくむとき、つるべをかくる具なり」を具体的に注し、和名「くるまき」を記す。また、「独楽さいく(独楽細工)」にも「轆轤」があると注する。

③元禄版本「轆轤」の図像は滑車のみを描く。この図像が①初版本「轆轤」の右に描かれた滑車とほぼ同じであることに注目したい。つまり、③元禄版本は、釣瓶を上下するための滑車を、別に「轆轤」として掲出したのである。

また、③元禄版本「櫛櫛」の本文は、「櫛櫛」の用途「水をくむ物」を記す。

櫛櫛 図のごとし。水をくむ物。

③元禄版本「櫛櫛」の図像は、①初版本「轆轤」の左の部分を踏襲し、別に「櫛櫛」を掲出する。

第二に、③元禄版本の「轆轤」「櫛櫛」の二項目が、④寛政版本では、再び「轆轤」一項目に統合されている。両者の本文は次のとおりである。

③元禄版本「轆轤」本文

轆轤は水をくむとき、つるべをかくる具なり。くるまきといふ。又独楽  
さいくに轆轤といふ物有。

④寛政版本「轆轤」本文

轆轤は水をくむつるべにかくる具なり。くるまきといふ。独楽さいくに  
轆轤といふ物あり。

両者の本文は字句に若干の異同があるものの、④寛政版本は③元禄版本を  
ほぼ踏襲している。

④寛政版本の各項目の図像は、半丁もしくは見開き一面に集約されてい  
る。「轆轤」の図像は、版面の左上にある。④寛政版本「轆轤」の図像は、  
①初版本と同じく二つの部分から成る。左の水を汲む装置の図像は①初版本  
と同じだが、右の「滑車」はやや形が異なる。

以上のことから、④寛政版本は、本文は③元禄版本の本文を踏襲しながら  
も、項目は③元禄版本の立てた二項目を一項目に統合していることが確認さ  
れる。

そもそも、③元禄版本が①初版本の項目を細分化したのは、項目の版面を  
縮小するためであった<sup>4)</sup>。しかし、④寛政版本では、図像が版面に占める割合  
とスペースが大きくなった。これが新たな画面構成、図像効果を工夫するこ  
とにつながったものと推測される。この版面構成の大きな改訂は、④寛政版  
本が③元禄版本の細分化した項目を統合する素地として機能したと考えられ  
る。

また、③元禄版本が細分化した項目の本文には、随所に重複がみられる。  
④寛政版本の撰者は、③元禄版本のこの欠陥を認識したうえで、項目の立て  
方を改訂し、項目の統合を図ったのであろう。

三、元禄版本の増補項目の削除

③元禄版本が増補した項目を④寛政版本が削除する方法には、次の二つの  
類型がある。

- (一) ③元禄版本の重複した項目を削除する
- (二) ③元禄版本が増補された空想上の動物の項目を削除する

(一)の用例は、「鰯鯛」「猩猩」の二例である。

紙幅の都合上、ここでは次の一例のみを取り上げて考察することとする。

表3は、①初版本の二項目「猩猩」が、③元禄版本では「猩々」「猩々b」  
二項目とされ、さらに④寛政版本がこれを「猩猩」一項目に改訂した過程を  
示したものである。

表3・「訓蒙図彙」寛文六年版本「猩猩」↓元禄版本「猩々」「猩々b」↓寛  
政版本「猩猩」





 <p>「訓蒙図彙」 寛文六年版 猩猩(卷十二・畜獸)</p>	 <p>「訓蒙図彙」元禄版本 猩々(卷十二・畜獸)</p>	 <p>「訓蒙図彙」元禄版本 猩々b(卷二一・雜類)</p>	 <p>「訓蒙図彙」寛政版本 猩猩(卷十二・畜獸)</p>
--	--	---	--

表3から、次のことが確認される。  
第一に、①初版本「猩猩」の一項目は、③元禄版本では「猩々」「猩々b」  
の二項目とされた。

①初版本巻十二畜獸「猩猩」の本文は、別名「狻狻」をあげるのみであ  
る。

又作狻狻。

③元禄版本の巻十二畜獸「猩々」は、図像は初版本「猩猩」の図像を踏襲  
するが、本文は猩猩の色、耳、面、足、酒を好むこと、その血を染色に用い  
ることを詳細に注する。

猩猩は、黄毛はさる、白耳は豕のごとし。人面人足。酒をこのむ。血を  
とりて染。

また、③元禄版本の巻二一雜類「猩々b」の本文が次のとおりである。

猩々能言とあり。形猿に似て人の面のごとし。声小児のごとくにして、酒を好むとかや。

③元禄版本「猩々b」の本文は、猩猩が言葉話すこと、その形、面、声について説明し、酒を好むことを詳しく注する。

③元禄版本「猩々b」の図像は、人の姿で柄杓を肩にかけ、目線の先には酒の壺があり、図像の左に杯とこれを支える台と覚しきものがあり、謡曲「猩猩」を想起させる図像である。つまり、③元禄版本は、①初版本では「獸」に分類されていた「猩々」を、「獸」以外にも、諸天神仙・諸祖師等を収める巻二二雑類も「猩々」を再掲し、謡曲「猩猩」を意識した新たな図像を加えたのである。

第二に、③元禄版本の増補した巻二二雑類の「猩々b」が、④寛政版本では削除された。

③元禄版本の巻十二畜獸「猩々」の本文は、

猩猩は、黄毛はさる、白耳は豕のごとし。人面人足。酒をこのむ。血をとりて染。

④寛政版本の巻十二畜獸「猩猩」の本文は次のごとくである。

猩猩は、海中にすむ獸也。毛色黄にしてさるのごとし。耳白く、面と足は、人のごとくにて酒をこのむ。血をとりて染。

④寛政版本「猩猩」の本文は「海中にすむ獸」と注し、元禄版本「猩々」の本文の内容をほぼ踏襲し、記述を若干改変する。耳が白いことを記して、「豕のごとし」を削除したのである。

④寛政版本「猩猩」の図像は、海岸に坐るという新たな構図である。これは①初版本、③元禄版本とは異なる、まったく新たな図像である。

つまり、④寛政版本は、本文は③元禄版本の本文をある程度踏襲するが、若干の改訂を施す。掲出語は①初版本の表記に戻し、項目は③元禄版本の重複した項目を削除して体裁を整えたのである。

(二)元禄版本に増補された空想上の動物の項目を削除する例

勝又基氏は、④寛政版本の項目について、次のように述べられた。

元禄版『訓蒙図彙』で初めて立項された項目のうち、「人魚」や、中国の「狸力」「猱」「棘斯」「畢方」といった鳥獸の項目が再び漏れた辺りに一つの傾向が見られる。<sup>5)</sup>

③元禄版本巻十二畜獸の末尾に、次の五項目「狸力」「猱」「狴訖」「狴訖」を増補するが、これらの本文は、いずれも「もろこし」で始まることが特徴である。

「狸力」…もろこし柜山に狸力といふけた物有。豚にて、けつめ有。こゑ狗のほゆるがごとし。

「猱」…もろこし鵲山にけだ物あり。さるにて、白き耳有。人のごとくにはしる。猱々となづく。これをくらへは、よくはしる。

「狴訖」…もろこし章我といふ山に猱といふけた物あり。豹のごとし。五の尾、一の角あり。こゑ石をうつがごとし。

「狴訖」…もろこし基山に狴訖といふけた物有。羊のごとし。九の尾、四の耳あり。目はせなかにあり。

「微徧」…もろこし三危といふ山に微徧といふけた物あり。牛のごとし。白き身、四の角有。毛は蓑をかうふるがごとし。

これら五項目は、いずれも『山海経』「狸力」「猱」「狴訖」「微徧」を出典とする。④寛政版本は、この五項目をすべて削除している。

③元禄版本には、巻十三禽鳥の増補項目のうち、「もろこし」で始まる項目が次のとおりある。

「畢方」…もろこし章我の山に畢方といふ鳥あり。鶴のごとし。一のあし、あかき文あり。あをき質、白きくちはしあり。

「棘斯」…もろこし灌題といふ山に棘斯と云鳥あり。雉のごとし。人の面なり。人を見るときは、おどる。みつから名をよぶ。

「数斯」…もろこし皐塗の山に数斯といふ鳥あり。鴟ににたり。人のあしあり。これをくへは、癭を生ず。

「鵲」…もろこし大行山に鵲といふ鳥あり。鵲のごとし。白き身、あかき尾、六の足あり。

「蠻蠻」…もろこし崇吾の山に蠻といふ鳥あり。鳧ににたり。一翼一目な

り。ならばとぶ。

この五項目も『山海経』を典故とする「畢方」「竦斯」「數斯」「鵠」「鸞」である。④寛政版本はこれらもまた削除している。④寛政版本は『山海経』に依拠する空想上の動物を掲載しない方針をとっているのである。

#### 四、『訓蒙図彙』寛政版本の編纂方針と刊行背景

『三才図会』は、空想上の動物を多数掲載している。しかし、『訓蒙図彙』①初版本は「麒麟」「獬豸」「騶虞」「鳳凰」「蛟」「龍」等の瑞獣を除いて、空想上の動物は一切掲載しない。④寛政版本が空想上の動物を削除したことは、①初版本の撰者中村惕斎の本意に回帰したこととなる。

④寛政版本の越前力丸光撰「増補訓蒙図彙序」は、①初版本の中村惕斎撰『訓蒙図彙』を啓蒙書として評価している。

自リハ非レ有ルニ善誘ノ在リ、殆ド不レ可レ得。於レ是有リニ若クハ中村一氏訓蒙図彙之術、可シ謂ツ善ト侮不レ倦者ト。

(善誘の在る有るに非ざるよりは、殆ど得べからず。是に於いて若くは中村氏『訓蒙図彙』の術有り。謂ひつべし、「善く誘えて倦まざる者」と。)

④寛政版本の春莊端隆「跋」もまた、①初版本が童蒙を教導するだけでなく、深く学問を研鑽した学者にも有益な書として高く評価し、当時の人々に珍重されたことを述べ、

惕斎先生所著図彙、其意所屬、蓋亦在乎此。其書奚ト翹訓ニ導童蒙ニ云爾。雖ニ宿儒老学ニ、亦有ニ資ヲ以広ニ致格之識。家一珎人ニ藏、良ニ有レ以故。

(惕斎先生著す所の図彙、其の意の属する所、蓋し亦た此に在り。其の書奚ぞ翹に童蒙を訓導するのみ。宿儒・老学と雖も、亦た資けて以て致格の識を広むること有り。家珎とし、人藏むこと、良に以有り。)

刊行背景について次のように述べている。

從ニ寛文ニ逮レ今ニ、殆ト百幾十年。版已ニ就ニ剞缺。今茲寛政己酉額田氏主人嘯三下河邊氏一、移ニ写舊様ヲ、再刻剞劂、而精工續

密。視レ舊ニ有レ倍ト焉。刻成、請レ余以ニ一語、余謂フ。近有ニ春朝齋山城名所図会、亦以ニ図繪之故、盛行乎世、朝摺暮印、洛陽紙貴。

(寛文より今に逮びて、殆ど百幾十年なり。版已に剞缺に就く。今茲に寛政己酉額田氏主人下河邊氏に嘯し、舊様を移写し、再刻・剞劂し、而も精工續密なり。舊に視べ、倍すること有り。刻り成り、余に請ひて一語以てす。余謂ふ、近る春朝齋山城名所図会有るも、亦た図繪の故を以て、世に盛んに行はれ、朝摺り暮印、洛陽紙貴。)

つまり、①初版本が刊行された寛文年間から寛政元年(一七八九)に至って、百何十年経り、元の版木がすり減るようになっていた。そうして、額田氏主人が絵師下河邊拾水に依頼し、①初版本に倣って絵図を描き直させ、再び版木を彫り直した。また、④寛政版本が刊行される九年前、安永九年(一七八〇)に、秋里離島撰、竹原春朝齋画『都名所図会』六巻が刊行された。好評を博したため、天明七年(一七八七)に続編『拾遺都名所図会』が刊行された。名所図会が風靡しているなか、書肆の人は、『訓蒙図彙』を狙い目として、増補版を刊行したことが読み取れる。

#### むすび

④寛政版本は、③元禄版本が細分化した項目を統合し、増補したために重複が生じた項目、空想上の動物を削除して、①初版本への回帰を志向している。また、④寛政版本は、本文の内容は元禄版本をベースにしつつも、序跋では、③元禄版本を言及せず、中村惕斎の原著①初版本を大いに賞賛している。このように、④寛政版本の編纂に際して、①初版本を強く意識している。

絵入り百科事典『訓蒙図彙』は、初版の際に好評を博すのみならず、刊行の百何十年後も、童蒙ないし学者に有益な書物として高評され、大きな変容を遂げつつ、強靱な生命力を見せている。

注

- (1) 旧稿では②寛文八年版本に言及しなかったが補訂した。
- (2) 拙稿『訓蒙図彙』寛文六年初版本から元禄版本へ―大衆化の位相をめぐって―(『文化・情報の結節点としての図像論文集(仮)』、晃洋書房、二〇二二年三月刊行予定)。
- (3) 使用テキストは次のとおりである。国立国会図書館所蔵・寛文六年(二六六六)山形屋刊版本(二一七一―一八)。国立国会図書館所蔵・元禄八年(二六八九)版本(特一一一九二〇)。同図書館所蔵・寛政元年(二七八九)皇都書林九皇堂刊版本(特一一一六一四)。
- (4) 注(2)に同じ。
- (5) 勝又基「江戸の百科事典を読む―『訓蒙図彙』の変遷」(『月刊しにか』第十一巻、第三号、二〇〇〇年三月)。